



## 特集「現代中国の国際的影響力拡大に関する総合的研究」 にあたって

高橋五郎（愛知大学国際中国学研究センター・所長）

本特集は、2009年末、愛知大学国際中国学研究センターおよび北海道大学東アジアメディア研究センターとの共催により開催された国際シンポジウム「現代中国の国際的影響力拡大に関する総合的研究」に基づいている。その開催経緯ならびにその趣旨は次のようなものであった。

愛知大学国際中国学研究センターは、毎年国際的規模のシンポジウムを開催してきたが、他大学研究機関と共催というかたちをとっての開催は、今回がはじめてであった。とくに共催というかたちをとったのは、そのテーマと深い関連がある。シンポジウムのテーマ「現代中国の国際的影響力拡大に関する総合的研究」とは、文字通り、現代中国が国際化を経て、さまざまな分野において、その対外的な影響力を増しつつある現状をまえに、それを研究するに当り、専門的かつ多様な目を取り組むことの重要性を認識したためであったからに他ならない。

そして、この現代中国の対外的影響力の増大という問題をめぐって、経済、政治・外交、メディア、環境、文化、社会などの領域から研究し、さらに領域を超えた全体討論を試み、課題についての問題意識と研究結果の共有を行い、国際的影響力を増す現代中国と向き合う国際社会が、いかにそれを受け入れ、相互の発展と平和の増進につなげ、国際社会全体がウィン、ウィンになる仕組みや構造を練り上げるにはどうしたらいいか議論したいと考えた次第である。

このような議論を行うに当たり、必要なのは、そのために、内外からもっともふさわしいと思われる専門家をお招きし、多様な議論を交わすことであろう。北海道大学東アジアメディア研究センターは、その研究テーマや研究者陣容の厚みからいって、

私たちにとり最良のパートナーだと位置づけさせていただいて、このシンポジウムの成功に向けてともに準備をしてきた。

シンポジウムでは、先述のいくつかの研究領域を3つに、すなわち経済、政治・環境、文化・社会に要約し、まずに3つの分科会に分かれて議論を行い、翌日、3つの分科会を統合して全体の議論を行った。

「現代中国の国際的影響力の拡大」というテーマは、多少野心的な意味合いを含んでいる。その意味で、北大の伝統的な学風とも合うように思う。このような多様な研究領域からこの問題を議論しあう例は、寡聞にして知らず、おそらくは内外において稀なことであったと考える。

このテーマは、中国の内部経済、内部政治、固有の文化や社会構造の変化や発展、変容というダイナミズムの反映でもある。この意味で、我々は、対外的な進出を行う現代中国、つまり外にある中国のみに目を向けてはならないことはいままでもない。しかし、現代中国の国際的活動は、中国国内諸要因の外延的拡大とばかりはいえない。そうした側面にも目を向ける必要があり、今回のシンポジウムは主には、このような点に焦点を当てようとする意図を含んでいた。

すなわち、国際社会という多様な国家が混ざり合う過程で形成された、その意味で、固有の原理・原則にしたがって動くフィールドに入って、そこで、作用を受け、内部の反映とはいえない自生的な展開を行おうとする動きである。しかし、この点を研究するには、現代中国は、まだ十分な外在的な活動を行っていない。

今回のシンポジウムではこの点に焦点を当てようとする意図を含みながらも、現段階では、経済、政治・環境、文化・社会

の各領域で、現代中国が国際的影響をどの程度及ぼしているか、その研究視点や方法、そして場合によっては、その実態の一端にも踏み込んだ議論を行えばよいのではないかと考えた。本研究は、今後も継続的なものとなるであろう。

実は、そうした研究視点や問題意識は、国際的な論壇では、すでに大きな話題になっている。その議論の一端について、主に現代中国の国際的影響力の実態を取り上げた英文の著書、論文等約30点から、関係する箇所を抜粋し、それぞれからキーワードと思われるものを示した参考資料を当日配布した<sup>1</sup>。キーワードの中にはPAX ChinaやPAX Sinicaというものがある。私が内部委員会の席上、Pax Chinaということばを使ったとたん、中国がそんな言われ方をするはずがない、とか、中国はローマや英国やアメリカとは違うのだから、このような言葉づかいは高橋の無知をさらけ出すものなのでやめた方がいいという批判を受けたが、すでに国際論壇では、PAX CHINAやPAX SINICAという言葉は、なかば日常的に飛び交っており、自由な議論が行われつつある。もちろん、現代中国の国際的影響力のあり方がPAX ChinaやPax Sinicaといったような性格をもっているかどうか、という点については諸説あり、私の意見もそのような諸説の一部にすぎない。

諸説という点に関していえば、現代中国の国際的影響力の拡大という課題に関し、3つの立場あるいは類型からの説明がありうるであろう。

最初に指摘したいのは、Denny Roy氏に代表される反中国的な立場あるいは考え方である。Roy氏は昨年、名古屋アメリカンセンターと愛知大学国際中国学研究センターが共催して開いた講演会に、講師としても登場されたことのあるアメリカの著名な研究者である。これは、国際化した中国についての見方の類型Iに属す。

第二の立場あるいは考え方は、中国の国際社会への多様な形態での進出が、多少のあつれきや摩擦があったにしても、それと向き合う国際社会へのプラスの貢献を導き

出すような関係あるいは国際的なシステムを構築していこうとするものである。その一人の典型的な研究者として、China Risingの著者アメリカ人のDavid Kang氏を挙げることができる。この立場は、類型IIとして区分できる。

第三番目の類型は、いまだ自らの立ち位置を明確にできていない、あるいはしていない人たちである。実は、日本の中国研究者を含む国際的な研究者の多くは、いまだこの部類に属する様子見の方々である。数の上ではもっとも多い、これらの研究者群のもつベクトルは2つに分かれ、上の二つのタイプのいずれかに向かって収斂されつつあるが、まだ十分にベクトルが、類型Iにも、類型IIにも届いている状態ではない。今回の特集が示す、私たちの共同研究テーマは、まだ生まれたばかりの乳児にすぎないと言っても過言ではない。この生まれたばかりのテーマを私たちは育て、立派な成人に育て上げていく必要がある。しかも国際的な連携がなければ国際的フィールドで活動する現代中国を見ていくことも、この研究テーマを国際的規模に育てていくことも不可能である。

今回、このような研究テーマについて、国際的な専門家のご参集のもと取り組もうとしたのは、このような理由からである。この点へのご理解をお願いする次第である。

さて、国際社会へ飛び出していった中国を国際社会はどのようにみているのか、またみなさんはどのように見ているのか。そして、もし、国際社会に飛び出して行った現代中国の部分を国際社会が相互に、有利に迎え入れるための安定的装置があるとすれば、それはどのような装置あるいはシステムだとお考えか。

一つの考え方として、私は、たとえば東アジア共同体構想があると思う。現在の日本の民主党政権が主張する考えに近いものであるが、まだ地域的範囲をどのようにするか、政権内部の意思統一ができていない段階でないことはご承知のとおりである。

しかし、現代中国の国際的影響力は、たんに東アジア地域においてのみ広がっているわけではなく、地球規模の広がりや深さ

をもっている。したがって、東アジア共同体構想だけでは不十分であることは否定できない。では、いったいどのような構想が可能なのか？

特集テーマが、そのような構想に思いをはせるきっかけになればいいと思っているが、むしろ、それは短時間で具体的な結論が出るほど単純なものではない。そこで、今回の特集を通じて導き出していただきたいことは、そうした問題意識をもちつつ、今後の研究課題を見出すことにある。

読者諸氏も、今回の世界的にみても新しいテーマ特集について、ぜひ一緒になって考えていただければ幸いである。

---

<sup>1</sup> 高橋五郎 「中国の台頭」,「中国の影響」に関する国際論調(文献と概要),愛知大学国際中国学研究センター,2009